

点描ぐんま経済

日銀支店長

見聞録

68

経営には、サイエンスとアートのどちらが大事か」。しばしば問われるテーマだ。これを思い出したのは、ある酒蔵にお邪魔したからだ。

この酒蔵の社長から見学のお誘いがあり、即座にお願い。当日、まずはこの酒蔵の水源地に連れて行っていただいた。酒蔵をご案内いただけるものだとばかり思っていた私には衝撃。しかも、水源地に流れている川のお水を、シャンパングラスで飲んだ後、スパークリングの日本酒が振る舞われたのだ。私は車を運転していたので飲

酒蔵の経営

造り手の思いに感動

めなかつたが、家族は本当に、おいしそうに、おいしそうに、水源地でスパークリングを堪能していた。そこで、社長は「うちは、先祖

がほれ込んだこの水を、酒造りの中心に据えているのですね」とうー、素晴らしい。

その後、酒蔵にご案内いただいて、製造工程や製品の一覧を拝見しつつ、お話を伺った。内容は①大学生のときに会社経営に参画したが、その時に借金の連帯保証人になられたこ

と②20歳代で、経営を担われていたご両親が他界され、倒産の危機を経験したこと③先祖

がほれ込んだ水を中心に据えて、製造方法を見直したこと④5年間で700回の失敗を繰り返して、瓶内発酵のスパークリングの日本酒を開発されたこと⑤「地元の自然、文化、歴

史、人々の営み、そして心を凝縮させることを経営哲学とされていること」など。

どのお話も実体験に基づいているため、リ

アティがあるし、何といっても引き込まれるものがある。そして、最も感動した話。それは、社長が若い頃にベテランの杜氏が腕を組んでいたの

で、なぜかと聞いたところ、「寒い時に手を温めておいて、手で温度を測れるようになるため」と言われたとの

話。そして、今でも社長は社員に「このモニターに映っている温度は本当か？」という問いを投げられていること。お酒造りの温

を今後も堪能したい。

度管理は、当然のことながら機械でも行うのだが、その機械だけに頼ってはいけない。機械だけに頼ると、温度に対する感覚が鈍るといふことだ。

これこそ、「サイエンス」と「アート」ではないか。技術の進歩に合わせて「サイエンス」を取り入れる。も

つとも、「サイエンス」に依存すると、皮膚感覚が弱くなって

岡山和裕（おかやま・かずひろ） 1996年7月生まれ。兵庫県出身。東京大学法学部卒。92年日本銀行に入り、業務局統括課長、決済機構局業務継続企画課長、情報サービス局総務課長などを



経て、2018年4月から現職。